

ラストラブ

2007(平成19)年6月16日鑑賞〈梅田ピカデリー〉

★★★



監督＝藤田明二／原作＝Yoshi『LAST LOVE』（講談社刊）／出演＝田村正和／伊東美咲／森迫永依／片岡鶴太郎／ユンソナ／細川茂樹／阿部進之介／高島礼子（松竹配給／2007年日本映画／110分）

……東京とニューヨークを股にかけ、団塊世代のサックス奏者を演ずる田村正和のカッコ良さを命題とした、切ないラブストーリー（？）が誕生！ 伊東美咲に対する「君の時間は未来だが、僕の時間は過去だ」という言葉の重みを味わいつつ、これぞ男の美学、これぞ男の死にザマというカッコ良さを堪能したいもの。もっとも、それは映画の中だけの話かもしれないが……？



よくできたストーリーだが……

私は、1988年10月～12月にフジテレビで放送されて大人気となった田村正和主演の『ニューヨーク恋物語』も、1990年の続編『ニューヨーク恋物語Ⅱ男と女』も、さらに2002年のスペシャル版『新ニューヨーク恋物語』も全然知らないが、その時のスタッフが再度結集し、田村正和を14年ぶりにスクリーンに復帰させて、同じような雰囲気映画をつくらうという企画は楽しいはず。田村正和もあの時と同じスタッフで映画をつくるなら、ということでオーケーしたとのこと。

そして、その原作となったのがYoshiの『LAST LOVE』だが、これは原作を書く段階から映画を想定して書いていたとのこと。Yoshiは、2000年に携帯サイト「ザブン」を設立し、サイト上で処女作『Deep Love』を発表して以来、破竹の勢いで次々とヒット作を書いている作家とのことだが、たしかにこの映画を見ても、わかりやすくよくできたストーリー。そのうえ、2時間の映画として収まるようにできているし、アピールすべきカンどころもしっかりと押さえているから、それなりに説得力のあるもの。しかしその反面、多少薄っぺらな感じは否定できないが、それは最近の人気小説共通の特徴（弱点？）だから、仕方なし……？

不自然さ その1——主人公は57歳……？

この映画は、1943年生まれで今は64歳になる田村正和を主演にしているうえ、①愛する妻と死に別れた後、小学生の一人娘佐和（森迫永依）を男手1つで育てているという設定、②2回以上（？）年齢の離れている若い女性上原結（伊東美咲）と知り合い、恋におちる（？）という設定だから、もともとストーリー構成に多少無理（不自然さ？）があるのはやむをえないもの……？

そういうアラ探しのような趣味の悪いことをしないのが、こういうカッコいい恋愛映画（？）を楽しむについての礼儀だが、それを理解しつつ、あえてこの映画の不自然さを2つだけ指摘しておきたい。その第1は、主人公阿川明（田村正和）の年齢。妻を失って5年。今はジャズとサックスを捨てて、親友朝倉大吾（片岡鶴太郎）の経営する旅行代理店で勤めている阿川は、一人娘佐和と2人で生活している。この映画の中では、阿川の年齢を明らかにされないが、朝倉と語り合う中での「俺たち団塊の世代は……」というセリフから推測すれば、57、8～60歳ということは明らか。すると、今小学生の娘佐和が12、3歳だとしたら、阿川が子供に恵まれたのは45～48歳ということになるが、そりゃちょっと不自然では……？

不自然さ その2——あんなにあっさり死ねるの……？

ニューヨークの老舗ジャズバー「バードランド」でカッコよくサックスを吹き、観客の拍手を受けた阿川は、「今日は僕の誕生日。妻と娘が来ているので皆さんに紹介したい」とやったのは、実にカッコ良かったが、花束を持ってきた愛妻友美（高島礼子）がその場で倒れ込んでしまったから大変……。冒頭、そんなシーンが展開された後、スクリーン上には「それから5年」という字幕が流れてくる。

そして今、阿川は小学生になった佐和と二人暮らし。すると、やはり友美はダメだったらしい……。この後展開されていくストーリーの中、ガンで倒れた友美が病院のベッドの上で阿川に見守られながら息を引きとるシーンが回想されるが、友美に扮する高島礼子の髪の毛は黒く美しいまま……。突然の交通事故死ならともかく、ガンが発見された場合、しばらくは苦しい闘病生活が続き、抗ガン剤を飲めば髪の毛が抜けたり大変なはず……。しかし、この映画はテーマを1本に絞っているから（？）、脇道のストーリーはあっさりと処理するべく、友美は美しい姿のままいとも簡単に

臨終……。そして、身勝手な生活を続け妻のことを省みていなかった自分が妻を殺したようなものと自分を責め、以降ジャズとサックスを断念した阿川の苦悩の姿を描くことに集中していく。

しかし、ラストにおける、主人公阿川のあっさりとした死を含めて、人間ってこんなにあっさり死ぬの？ という疑問がどうしても……？

最悪の出会いから……。もよくあるパターン

阿川と結の出会い是最悪。朝、大きなビニール袋2つを持ってゴミ箱に捨てようとした阿川をとがめ、「分別していないゴミは受けつけることができません」と強硬に拒んだのが、神奈川県庁に勤めている結。今朝はゴミ出しの実態調査をしていたところ、偶然こんな常識はずれのおやじに出くわしたというわけだ。

仕方なくゴミを持ち帰った阿川は、「生意気な女だ」とつぶやくし、清掃着を脱ぎさっそうと登庁した結は、デスクにつくなり「あのゴミおやじが……」とつぶやく始末……。しかし、こんな最悪の出会いから徐々に持ち直していくというパターンは、恋愛小説にはよくあるパターン……？

こちらの県庁さんは……？

織田裕二がK県庁の「県庁さん」を演じた『県庁の星』（05年）は、公務員改革と行政改革の必要性を若者感覚で理解させるのに格好の素材だったが、『ラストラブ』で伊東美咲扮する「県庁さん」は真面目一辺倒で、頑張り屋の女性。したがって、仕事も恋も一生懸命で、今は婚約者坂原大樹（細川茂樹）との式場選びや新婚旅行などのウエディング準備で大忙し。女性にとってこの時期は人生最高の時期だが、そんなに何もかも予定どおり決めていて大丈夫……？

脇目もふらずただ1つのことのみに集中して駆け抜けていく人生も悪くはないが、どこかに余裕をもたなければ、つき合っている男もしんどくなるのでは……？ そんなことを考えながら結を見ていると案の定、ニューヨークのホテルの部屋で電話をとった結に坂原から告げられた言葉は……？

機内でバッタリ、の確率は……？

原作はよくできているが少し薄っぺらいと思うことの1つは、阿川と結の2人が、

ニューヨーク行きの飛行機内でバツリ鉢合わせするところ……？ それはなぜなら、阿川は旅行代理店勤務だから、ツアーのコンダクターとして急遽ニューヨークに飛ぶこともあるだろうが、「県庁さん」に突然ニューヨークまで飛んでいくほど緊急の仕事があるとは思えないから……？

最悪の出会いをした2人が、数日後にニューヨーク行きの機内で、しかも通路を隔てた隣り同士で出会う確率は何%……？

田村正和のカッコ良さがこの映画の命題……？

パンフレットにある、プロデューサー・中山和記×監督・藤田明二のインタビュー対談の中で、中山プロデューサーがはっきりと「田村正和をいかに魅力的にみせるかに尽きました」と述べているように、この映画の命題はそれ。したがって、ニューヨークに到着した阿川と結がそれぞれの仕事を果たしていく中で、さらに偶然出会い、次第に結が阿川に心を開いていくサマが、実にカッコ良く描かれていく。

結婚を控えた30歳前の女性(?)の不安、そして婚約者の坂原から突然別れを告げられ失意のどん底にある女性の悲しみを、団塊世代のおじさんがいかにカッコ良く受け止めるのか、そのお手並みをしっかりと拝見し、味わうことができるはず……？
こんな映画を見ていると、俺にもこんな偶然の出会いがないかなと期待するおじさんがたくさんいるはずだが、そのためには今はやりのチョイ悪風を含めて、常にカッコ良く生きていることが大切……？

未来の時間 vs. 過去の時間……？

この映画を見ていると、小学生の娘と二人暮らしをしている阿川の家の中に、結が次第に深く入り込んでいく様子をはっきりとわかる。そしてそれが、単に佐和をかわいがる気持や、子育てが大変だろうと思うおじさんへの親切心などではなく、年の差が大きいとはいえはっきりと阿川に対する男女間の愛だということを結は自覚しているはず……。そして、それはきっと阿川も同じで、互いに口に出して言わないだけ……？

したがって、そんな2人の姿を見て、結の同僚(部下?)の河島徹(阿部進之介)が、「若い娘をたぶらかさないで下さい」と阿川に抗議したのはある意味当然……。だって、このままこんないい雰囲気が続けば、年の差約30歳という2人の間の結婚も

射程距離の中に入りそうだったから……？

私は別にそれが悪いと言っているのではなく、阿川がカッコ良く「君の時間は未来だが、ボクの時間は過去だ」と宣言している以上、少なくとも阿川の価値観では2人の結婚はありえないはず……。

阿川のそういうスタンスがはっきり決まっている以上、結がどんどん深みに入っていることを知りつつ、阿川がそれを受け入れるのは罪なことかも……？

ラブシーン一切なし、をどう評価……？

恋愛映画には程度の差こそあれラブシーンがつきものだが、この映画に限っては、ベッドシーンをもとより、キスシーンも手を握り合うシーンもなく、せいぜい一度抱きしめ合い、木陰で寄り添うシーンだけ……。

ガンが発見されるまで阿川は健康な団塊世代の男だったのだから、5年前に妻と死に別れてから一切の女性関係なしというのは、果たして……？ しかもそれが、結とこんないい雰囲気になってもずっと同じというのも……？

もっともこれはストーリーの書き方によるものだろうが、この映画は田村正和のカッコ良さを際立たせるのが命題だから、そんな男がちょっとでも性的欲望のようなものを見せるのは厳禁……？ それはそれでわかるのだが、私に言わせれば、それも多少現実離れした絵空事……？

小学生でも女は女……？

この映画で阿川の一人娘佐和を演じる森迫永依は、2007年4月25日に観た『憑神』(07年)で死神のおつやを演じていた、芸達者な1997年生まれの10歳の女の子。昼間はずっと外に出ている団塊世代の父親との2人だけの生活は小学生の娘にとって大変なはずだが、5年前に母親を失った佐和は実にしっかり者。そのうえ、阿川と結との間の微妙な恋心の展開をしっかり理解している様子を見ると、さすが小学生でも女は女……？

ステージへの復帰は……？

ニューヨークへ出張中、婚約者の坂原から別れを告げられ落ち込んでいた結を阿川が連れて行ったのは、かつて阿川がサックスを吹いていたバードランド。隅のカウ

ンターで結と並んで静かにウイスキーを飲んでいて阿川だったが、その姿をかつての仲間に見つかり無理やり（？）ステージに上げられた阿川は、5年前と同じようにサックスを吹き始めたが……？

そんな阿川の吹くサックスの音色に感動した結だったが、同時にそれを商売の視点から聴いていたのが父親がジャズバーを営んでいる李玲（ユンソナ）という女性。東京に戻った阿川はそんな李玲から是非ステージに上がってほしいと勧誘され、さらに親友の朝倉や結からもそれを後押しされたが、果たして阿川のステージへの復帰はあるのだろうか……？

これぞ男の美学！ これぞ最高の死にザマ！

ステージに復帰し、結を含めた少し奇妙な（？）人間関係の中で再び楽しい日々が始まった途端、皮肉にも発覚したのが阿川の末期ガン。その余命はあと3カ月とのこと……。

結はもちろんそれを知らないし、今やマネージャー的な存在となっている李玲もそれを知らないのは当然。そこで李玲が阿川に提案したのが、アメリカでの演奏ツアー。体力的にツアーに耐えられるかどうかわからない阿川だったが、それを敢然とうけたのはさすが本物のミュージシャン。他方、阿川が飲んでいて薬の袋を偶然見つけ、それをインターネットで調べたことによって阿川の病名を知った結だったが、結もそれを告げず、黙って阿川をニューヨークに見送ったのは立派なもの……。

ここから田村正和が見せる男の美学はさすがカッコいいものだから、彼のような生き方を望む人は是非参考にしたいもの……？

ミュージシャンなら演奏の最中に死ねたら本望……。すると、弁護士の私なら法廷で弁論の最中に死ねたら本望……。しかし阿川の最後は……？

こんな死に方ができたら最高というカッコいい死にザマに拍手を送りたいと思ったのは、きっと私だけではないはず……？

2007(平成19)年6月18日記